深い思考がある学び

学校教育において「アクティブ・ラーニング」は花盛りである。

今日では、言葉ではなく、実際にどのような授業を展開するかに重点が置かれ、日常的に授業実践が行われている状況なのかも知れない。

教育行政学の視点から考察すると、法的拘束力を持つかは別として、公的な機関（組織）からの文書に、「アクティブ・ラーニング」という具体的な教育方法が明示されたことで、すぐに全国一斉に研究と実践が行われる「すごさ」を感じている。それだけ、先生方が教育に関して意欲的に取り組んでいると理解したい。

さて、本題に入る。

先日、高校理科の模擬授業を見た。内容は「原子の酸化数」である。

先生は、中学校における酸化の意味と前時の学習における高校の酸化の意味を簡単に確認し、教科書に書いてある原子の酸化数の取り決めごとを解説していった。

途中で、演習問題も盛り込みながら進めていった。

理科以外の教員も生徒役として参加していたので、わからない顔をした方も多かった。

授業が終わって、「わからん」、「難しい」という声と「これ、パターンを覚えたら簡単や」という声が聞こえた。

進学校で、大学入試のための学習に重点を置く学校では、後者の分からなくても問題を解き得点してしまうことがあるだろう。また、学んでいるうちに「なぜ？」が出てきて自ら振り返り、理解を深める生徒もいるだろう。

別の日に、ある研究者の話を聞いた。内容は、『アクティブ・ラーニング』だけでは形骸化する危惧を感じている。真に生徒が深く思考するような授業でないといけない。」とのことである。

この模擬授業では、いくつかの視点がある。

1つは、先生の指導である。本来、最外殻電子の数など既習内容に触れ、モデル等も示しながら、酸化数はいったいどのような意味を持つ数かを説明した方が理解は深まるだろうが、今回の先生はそれをしなかった。単に、今日の大学が学生を選抜するための試験に合格する学力ならそれでいいだろうが、せっかく物質の学習をするには物足りなさを感じる。

2つめは、授業の見方というか授業法の評価である。グループ活動やICT機器が無くとも、生徒が考える授業は存在する。逆に、積極的な活動があり、機器を使っても、単なるお喋りや動き回っているだけの授業もある。授業を見ての助言には、助言者の力量が試されるかも知れない。

さて、最近思い出すことがある。自分が教員になった頃、新しい学力観が導入され、学ぶ意欲が学力として重きを置かれはじめた。当時、授業中何にもしゃべらない生徒であるが、後々話を聞くと、学習内容にすごく興味があり、楽しいと聞いたことがあった。それに対して、発言もし、活発であるが、目標とする学力がついていない生徒もいたことだ。

どのように情意的な学力を評価するか、様々な評価法を考え、実践し、その有効性を評価したことがあった。現在の、能動的で、対話的で、深く思考する学習には、当時の指導法や評価法が見直されるのかも知れない。

他からの「～をさせよ」、「～を使用せよ」でしたからといって成果が上がるほど簡単なものではない、と実感する今日この頃である。

改めて、先生が生徒の様子を理解し、教材研究や指導法、評価法を研究し、今後じっくり取り組んで育必要がある程度のことであろう。